
幽靈電灯

虹迺渢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽靈電灯

【ZPDF】

Z0611B

【作者名】

虹迺渢

【あらすじ】

俺は小さい頃『幽靈電灯』が怖かった。だって名前を聞くだけで出てきそうだろ?『幽靈』が。そんな俺のちょっとだけ変わった話。

『幽靈電灯』

この言葉は、俺が小さい頃に母親が使ってた言葉だ。
幽靈電灯とは、電柱についている街灯のことだった。

老朽化をして、点滅をする街灯。

それを、母親は幽靈電灯と呼んでいた。

そして俺は、その言葉によつて小さい頃は点滅する街灯が怖かった。

(当たり前だが、今は違う)

だって、そんな言葉だとほんとに出できついで怖いだろ?

幽靈が。

12月に差し掛かった夜。

バイトを終えて帰宅しようとしていた。

高校生の1年目、部活も入らずほとんど毎日バイトをしている。

高校はバイトを許してないが、見つかなければいいのだ。

「やっぱいな。もう少し着てくればよかつた」

今は10時過ぎ。

2枚Tシャツを着ているだけでバイトに向かつたのが間違いだった。

今いるところは、帰り道の工場地帯だった。

大型トラックが通る理由から大きく道が作られ、遮るものは何も無い。

ただ、街灯がところどころにあり、そのいくつかは不規則な点滅を繰り返している。

そんなところを歩いているのだ。

12月の夜に。Tシャツ2枚で。

「仕方ないだろ。急いでたんだから」

誰にでもなく言い訳をする。

まあ、この工場地帯を抜けないと住宅街がある。

住宅街の一番近くの家が自宅だ。

まあ、10分あればつくだらう。

歩いていると、工場の入り口の幽靈電灯が目に付いた。
誰かが立っている。

この辺りならば、比較的知り合いはいる。
だから、よく顔を見ないで頭を下げる。

「こんばんは」

そういうて、通り過ぎる。

と、

「ねえ、君」

声をかけられた。

驚いたことに声の主は女性で、しかも振り返ってみると同じぐらいの年齢だった。（見た目）

比較的暗い場所のせいで一際異様に見えるその瞳。

瞳は真っ黒で、妖しく輝いているように見えた。

そして、その女の子はみんなが思うような普段着ではなく、着物だった。

点滅する街灯。

「ねえ、君つてば。こんなところにいると危ないよ？」

「え？ それってどういう・・・」

時代錯誤に陥った感覚だった。

寒いのも気にならないぐらい不思議な感覚。

目の前の子は、艶のある黒髪で短く切りそろえてあり、瞳と同様妖しい雰囲気をしていた。

テレビで見る昭和の、いやそれより昔の子供のような

それを確定するのは、俺の記憶。

ここら辺の学校ならば、それなりの人を知っているはずだが、この

子は見たことが無い。

「いい？ 今夜は危ないよ。 今田はもう外に出ない方が良いよ」

「あ、ああ。 分かった。 それじゃ」

質問も受けつけず、立ち去れという意味を含んだ言葉。
素直に家へと歩き出す。

なんだつたんだ？ ほんと時代が狂つた感じだつたな。

そう思いながら振り返り、思わず立ち止まる。

そこにはもう人影は無く、点滅を繰り返す『幽靈電灯』。

現実ではないと思わせるような、そんな何とも言えない感覚。
こんなこと、もづ無いだろうな。

不思議とまた会つてみたいと思つていた。

胸にもやもやを持ちつつも家に向かつた。

胸のもやもやが気になりのどが渴く。

ひどく甘いジユースがのみたい。

工場地帯になれば自販機はある。

『今夜は危ないよ。 今田はもう外に出ない方が良いよ』

反芻される彼女の声。

この胸のもやもやは何だろ？

そう心の隅に思いながら家の中で今田を過ぐす。

～次の日～

「あ～っ！ もう、またギリギリだよ……」

走りながらバイトに向かつ。

学校とバイト先は正反対の場所にあるのだ。

今は、西の空に日が沈みかかっている。

いつもの工場地帯を通つていぐ。すると

「えつ……」

工場の一つが黒く崩れている。

周りを囲む警察が事件があつたと知らせる。

思わず近くの警官に訪ねていた。

「何があつたんですか？」

「ああ、昨夜遅くにこの工場で火災が起きたらしい。まあ、電気関係が原因の事故だと思うよ。この工場の周辺も結構焼けたみたいだね。ぎりぎり住宅街までは届かなかつたみたいでよかつたよ。住宅地を巻き込んでたら死者が出てただろう。」

「・・・・・！」

驚いた。

昨日の子はこのことを言つていたのか？

なんで知つていた？

あの子はいつたい何者だ？

実在するのか？

俺はこの事故に巻き込まれそうになつたのか？

それを止めるため？

途方も無い疑問が頭の中を縦横無尽にめぐる。
その日のバイトは集中できるはずが無かつた。

バイトの帰り道、またいつも道を通る。

焼け焦げた工場の入り口の幽靈電灯。

今日も不規則な点滅を繰り返している。

昨日の少女はここにいた。

いや、いたのか？

まあいいや。

今日はいないし、これからも姿を現さない。

不思議と確信できた。

あれは幽霊だつたのか？

幽霊だとしたら過去の認識を改めよう。

幽霊は怖いものだけではない。

彼女に会うためにこの道を通りう。

そして、一度聞いてみたい。

「君は幽霊なのか？」

優しい、優しい幽霊電灯の、幽霊なのか？

と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0611b/>

幽霊電灯

2010年12月29日02時00分発行